

寺田寅彦伝記記述上の疑問

大森 一彦

中谷宇吉郎は、「専門の理学研究以外にも師の寺田張りの名随筆家で、〈吉村冬彦〉のペンネームで膨大な随筆集も残した」と書いてある文章を読んだ。意表をつく直言だが、巷の与太記事にあらざり、れっきとした学術雑誌に載った真面目な研究者の論文の中の一節である。してみると、いずれしかるべき根拠をふまえた発言であろうが、疑問を感じたのは事実である。

筆者は先に、「中谷宇吉郎」(1900～1962)につき、そういう定説とは異なる見解を記している事例をいくつか集めて、「中谷宇吉郎伝記記述上の疑問」という小文にまとめ、読者各位の判断を仰いだが(註)、本稿はその「寺田寅彦」(1878～1935)版である。

(註)「六花：中谷宇吉郎雪の科学館友の会会報」No. 34. 2010. 12. p. 4～5.

(1) 菊地勝弘著「中谷先生と日本式ローマ字」という論文がある(「雪氷」66巻6号. 2004. 11. p.715～718). その中にこういう条りがある。「田丸卓郎(1872～1932). 岩手県盛岡市出身. 東大教授で、五高、東大で寅彦の物理学の先生. 寅彦が父の推めで、東大で造船学を学ぶが後に田丸の物理学の講義を聴き、また実験を見せられ物理に鞍がえをさせたほどの先生であった」[下線は大森による. 以下同].

寅彦に造船学を学ぶことを勧めたのは父であること、しかし田丸教授の授業で物理学の魅力に惹かれ、「物理に鞍がえを」したことなど、進路決定にあたり、田丸の影響が大きかったことは、寅彦が自ら記しているところである(「田丸先生の追憶」). 疑問点は、大事なその時期を「東大で」、としていることである。それでよいか。あえて異説を唱えるからには何か根拠があるに違いない。

(2) 近藤 滋著「こんどうしげるの生命科学の明日はどっちだ!?」という連載記事がある。その第11回「吾輩はキリンである／模様はひび割れている」(「細胞工学」31巻5号. 2012. 4. p. 608～615)の冒頭で、オリジナルな学説を発表した寺田寅彦を紹介して、こう記す。「寅彦は、X線結晶解析に関して非常に先駆的な論文を書き、その功績もあって、日本物理学会の会長も務めた。大物である」。これは従来の寅彦年譜には見えない新説である。

寅彦の時代は、数学者と物理学者合同の「日本数学物理学会」が組織されており、数・物それぞれが分離し独立したのは戦後のことである。また学会のトップは、「委員長」と称しており、「会長」ではなかった。細かいことだが訂正を要する。そこで、寅彦の委員長就任の件だが、数物学会歴代委員長の名前が一覧できるような資料があれば、容易に確認出来るのだが、見当たらない。それにしても寅彦は、“長”と名のつくような組織上の地位に就くことを、ことのほか回避した—というのが通説のようである。著者が参照したそれを覆す資料があるとすれば、ぜひ見たいものだ。

(3) 山田一郎著「寺田寅彦とその周辺」という講演記録がある(「健康医学」. 7巻2号. 1993. 2. p. 7

～14). タイトルから窺われるように話題は多岐にわたるが、大正 12 年 9 月 1 日の関東大地震発生後における寺田の動静についても語っている。「…それから震災の調査に大車輪の活躍をします。理学部、工学部の教授、学生を率いて東京市内の火災現場を全部歩く。消防、警察の協力を得て詳細な聞き書きをする」と話す。大患後の寺田のめざましい活動についてはよく知られており、これはそれに添った発言であるが、詳細は少し異なるのではないか。

寺田の主導で実施された調査の成果は、「大正 12 年 9 月 2 日の旋風に就て」(震災予防調査会報告. 100 号戊. 1927. p. 185～227) と題する報告書にまとめられているが、集中その(2)「旋風の分布」の冒頭で、この調査に従事した者として、「東京帝国大学理学部物理学科学生、今岡」以下 31 名の氏名が列挙されている。彼らはもともと「中村 [清二] 教授の指導を受けて、全火災区域に亘り、系統的に地区を分ち、分担的に所謂火流の調査に従事されたので、其の序に此等諸氏に依頼し」旋風の調査を行った旨、寺田は記している。その他「著者自身が単独或は今村 [明恒]、中村 [清二] 両委員 [大森註: いずれも理学部教授] と、災害地の各消防署警察署を訪問し」聞きとり調査も行ったと記す。話の後段は寺田の記述と整合するが、前段(下線部分)に対応する事実関係は確認出来ない。

(4) 鎌田浩毅著「寺田寅彦の仕事—どう学び、生かしたか」という文章がある。池内 了責任編集『寺田寅彦—いまを照らす科学者のことば』(KAWADE 道の手帖. 2011)の中の 1 編である(p. 107～118)。「寺田の残した論文の量が生半可ではないことに私は非常に驚いた」とし、「欧文論文二〇九編、和文報告五十八編」とその数をあげ、「『寺田寅彦全集科学篇』(全六巻)には学術論文が収録されているのだが、大型本で六冊となるボリュームにまず圧倒された。三千ページに及ぶ欧文論文を書いたとは、科学者として生産性の高さには目を見張るものがある」と記す。この「三千ページ」という数の根拠を問いたい。

試みに、欧文論文を収めた第 1 巻から第 5 巻までのページ数(本文のみ、目次は除く)を全部足してみると、1,944 ページとなる。第 1 巻にある Terada の「Biographical Sketch」(19p.)や、各巻の目次を加えても二千ページには充たず、その差は大きい。思うに、著者は〈何か〉を参照して、そこに記されていた「三千ページ」というデータを疑いもせず引用したのであろう。その〈何か〉はまた先行の〈何か〉を引用したのであろう。こうして何代かさかのぼって行きつく先にあるおおもとの情報源は、『寺田寅彦全集科学篇』の「内容見本」(岩波書店. 1936)ではなかったかと推定する。「寅彦研究」[寺田寅彦全集文学篇月報]. 第 1 号(1936. 10)にその要旨が転載されているが、そこに「全六巻、四六倍判、総頁約三千頁」とある。時期的にみて、企画の初期段階における信頼性の乏しい概数(試算を誤り過大に見積もった数)が、吟味されることなく現在でも通用しているのだ。

(5) 尾池和夫執筆の「ヴェーゲナーから 100 年／寅彦が伝えた大陸移動説」という随筆が『高知新聞』(2009. 11. 15 付. p. 3)に掲載された。「来年は、ヴェーゲナーが大陸移動説を思いついたとされる 1910 年から 100 年である」と書き出される。そして「その大陸移動説を日本に初めて紹介したのは、高知出身の寺田寅彦であるといわれている」と続く。その具体的な史実として、ベルリン大学で学んだ寺田

が帰国後、「東京地学協会総会で『アイスタシーに就て』と題する講演を1915年に行い、その中でヴェーゲナーの大陸移動説を紹介したという」と記す。著者は、先行文献に依拠しつつ、伝聞のかたちをとりながら、慎重にこれを書いているのだ。

寺田のその講演は、新版『寺田寅彦全集』の第15巻(岩波書店、1998)に収められている(p. 40~55)。ところが、これを読んでみても、どうした訳か、どこにも〈ヴェーゲナー〉の名前も、〈大陸移動説〉という言葉も出て来ない。…そう指摘されたら著者はどう応えるだろうか。先行の〈何か〉に出ていた記述を信頼して引用したのだから、責任はその著者にあると言うかも知れない。一体その〈何か〉には何と書いてあったのだろう。その〈何か〉とは何か。それを確かめたいのだが、出典を明記されなかったのは、はなはだ遺憾である。これは大変興味深いテーマであるが、情報源をたどることが出来ず、置き去りにされた読者はむなしい思いをするだけである。さてそうになると、日本で初めて…という寺田のプライオリティはどうか。

(6) 諏訪兼位著『地球科学の開拓者たち—幕末から東日本大震災まで』(岩波書店、2015)という本がある。第1部第4章「関東大震災の衝撃」の後段で、「日本海拡大説を主張した寺田寅彦」(p. 83~90)のタイトルのもと、寺田の先駆的な業績を詳しく解説している。

その文末に至り、こんなことに話題を移す。「寅彦の妻君運はよくなかった」と書き出し、初婚の夏子は「一子を残して…世を去った」、再婚した寛子は「四人の子を残して世を去った」とし、その次、「大正7(1918)年に結婚した紳子との間には二子を得た」—と記す。おやそうですか、と、ひとまず言っておこう。真偽は問うまい。それよりも、〈地球科学の開拓者〉をテーマとする本に、何のためにこのようなことを書かなければならないのだろう。何故このようなことを書きたがるのだろう。著者のセンスを疑う。

*

寺田寅彦に親しんでいる読者なら、すでによく承知していることを繰り返し読まされるのは、退屈でやりきれないものである。それとは逆に、はてな?と思わず考え込んでしまうような〈新説〉を、典拠も示さず平然と書いているのを読むのも、心穏やかではない。しかし、違和感があっても、まずは書かれていることを尊重し、素直に受けとめたい。何しろそれぞれの道の専門家の記述だから、思い違いや書き間違いなどあり得ないはずだ—これが文献を読む時の基本的な態度であった。

21世紀に入ってからこのかた、寅彦の残した文理両面にわたる言説に関心が集まり、さまざまな寅彦像が描かれ、かれをめぐる論評が数多く発表されるようになった。これを受容する寅彦ファンも、知識を試されているようで、なかなか気がぬけない。本稿で紹介したような興味深い事例はまだまだあるが、今回はこれ位にしておこう。